

佐藤知己著『アイヌ語文法の基礎』

(東京, 大学書林, 2008年4月, 392頁, 8500円+税)

奥田 統己

表紙画像

本書は、アイヌ語千歳方言の話者白沢ナベさんから得られた資料に基づく、アイヌ語の教科書である。千歳方言は、従来もっとも分析が進んでいた日高の沙流方言との文法・語彙の違いが小さいことで知られている。この方言から学び始めたものは比較的容易にその後の学習の手がかりを得ることができるし、研究するものも金田一京助、田村すゞ子らによる沙流方言の分析の成果を直接踏まえることができる。また本書の「はじめに」も触れているとおり、白沢さんはとくにその晩年「アイヌ語を残す」ことに情熱的に取り組み、多くの研究者・学習者を導いたかたである。千歳方言の資料の蓄積と文法の分析において彼女が果たした役割は極めて大きい。つまり改めて紹介しなおすなら、本書は研究の蓄積と話者の意思とが交わったところに生まれ、アイヌ語の研究・学習の両面において今後の流れを方向づける著作である。

1 本書の価値を高めている特徴の一つは、白沢さんによるアイヌ語の例文そのものである。本書を手にとるとすぐに、たとえば「第3課 基本構文」の例文(2)「あの人がこの人を嫌う。」や例文(3)「あの奥さんがあの男の人に一匹の魚をあげた。」、「第14課 目的格人称接辞」の例文(2)「あの人が魚を一匹お前にくれたのか。」などの単純な構造の例文、あるいは「第18課 主格・目的格」の例文(2)「お前たちが私を手伝ってくれたおかげで私の仕事が早く終わった。」のような文法事項を端的に理解できる例文に触れることができる。ところがアイヌ語の現地調査においては、このような入門・初級の教材になりやすい例文こそ、話者から教えていただくのがしばしば難しい。本書が収めている例文は、話者と研究者双方が協同し工夫を重ねて得られたものに違いなく、アイヌ語学の大きな財産である。

2 全体の構成は、第1課の概観、第2課の発音のあと、第9課あたりまでが基本的な文の組み立てに関する項目、第10課から第20課あたりまでが人称を中心としたアイヌ語学習上のポイントとなる項目、そして第21課以降がやや専門的で著者の先端的な関心により結びついた項目、と大きく3つの部分からなっているように読める。その後ろ三分の二に示された分析の深さに比べると、初めの三分の一はやや網羅的な記述にとどまっているところが見受けられる。たとえば「第6課 接続助詞」に示されている *ayne* には「～し続けた結果」という意味だけが示されているが、評者の手元には白沢さんが語った物語中の次のような例文がある。

tane paye-an *ayne* sirkunne p ne kusu kira-an ma hosippa ka a-sitoma ruwe ene an i ne.
今や私たちが行くうちに暗くなるので私たちは逃げて帰るのも恐ろしいのだ。

ここでは、帰り道を「行き続けた結果」暗くなる、というのではあまり意味が通じない。この例のように肯定文を受けて「～するうちに」と訳される *ayne* の用法は『アイヌ語千歳方言辞典』（中川裕、1995、草風館）も示していないが、他の方言には報告があり、千歳方言でも認めてよいだろう。

3 「第 10 課 自動詞と他動詞」以降は、場合によってはこれまで著者が単独の論文として問題にしてきた点などもトピックとして取り上げられるようになり、随所で立ち止まり考えながら読み進めていくことが求められる。たとえば「第 11 課 動詞の単数形と複数形」にさりげなく書かれている 3 項動詞の *kore/korpore* の単複の問題なども、調査するのは容易でなかったと推察する。「第 16 課 命令文」の文法解説にある、命令文に人称代名詞が用いられることが稀であるという指摘も興味深い。ただ評者の手元には白沢さんによる次のような例文がある。どうしてこの例文が稀な用法の例になるのか、もう少し著者の考えの背景を教えていただければよりありがたかった。

eani hem ku!

あなたも飲みなさい!

また「第 27 課 尊敬表現」には、*totto*「お母さん」のような親族名詞が自称詞としても用いられるという報告がある。管見ではこの用法は本書の著者による新発見であり、「自称詞として使えるのは、自己より上の世代を指す親族名詞」という記述から、ここでも背景に周到な調査のあることがうかがえる。

沙流方言では動詞が「2 人称（単数）主格・1 人称目的格」の人称変化をする場合に、主格の人称が表れず「1 人称目的格」だけが表示されることが知られている。「第 34 課 雅語と口承文芸」では、千歳方言の場合「2 人称主格・4 人称目的格」の場合も主格の人称接辞が表示されず「4 人称目的格」だけが表示されることを指摘している。この観察は沙流方言の事実と異なっているだけでなく『アイヌ語千歳方言辞典』の巻頭にある人称接辞の一覧表とも食い違っており、また本書の示している例が意味上の命令表現だとも解釈できるので、議論を呼ぶかもしれない。しかし評者の手元には次のように確実な平叙文の例があり、本書の記述を支持しているので紹介しておく。

“*ukasuy pirka iku ratci iku eci-ki kusne na*” *sekor e-itak kor*

「いっしょにりっぱな酒宴和やかな酒宴をなさってくださいよ」とお前はいいながら

kamtaci ka sine tara i-sere oro wa amam neyakka sine tara i-sere ruwe ene an i.

麴もひと俵私に背負わせそれから穀物でも一俵私に背負わせたのである。

4 「第 17 課 疑問文」は一つの重大な提案を含んだ章である。千歳・沙流方言に限らずアイヌ語のさまざまな方言では、疑問詞を含んだ疑問文において通常のコピュラ *ne* が期待される位置に（おそらく存在動詞由来の）*an* が用いられることがある。従来の分析はこの事実を追認するにとどまっていたが、本書はまず「*ne* の補語は主語の性質を適切に叙述するものでなければならない」と指摘したうえで、「疑問詞はそもそも性質が不明であることを意味する

形式であるから、指定詞 *ne* の補語としては不適切と考えられるために、代わりに存在動詞 *an* が用いられるのではないだろうか。」という説得力のある説明を示している。

著者の考察はさらに進み、*tanpe hemanta ne ruwe an* ? (これは・何・である・の・であるか) のように名詞化辞 *ruwe* の内部では *ne*、外部では *an* が用いられる例を、*tanpe [hemanta ne ruwe] an* ? のように分析して「*[hemanta ne ruwe]* 全体が *tanpe* と同格である」と述べている。この提案は単に疑問文中の *an* の説明にとどまらず、アイヌ語の名詞化辞を用いた表現の構造そのもの分析に関わる議論に発展するだろう。たとえば、平叙文の名詞化辞のあとの *ne* はどのような働きをしているのだろうか。また同じ課の例文 (7) *hunna a-ne hawe an* ? 「あなたは誰だということですか」はどのような構造を持つ文として分析すべきだろうか。

5 「第 35 課 語形成」にも著者による新しい知見・提案が随所に盛り込まれている。たとえば前半の「疑似修飾構造」をめぐる議論が踏まえている「語」と「句」の区別は、実は従来のアイヌ語学が正面から扱ってこなかった問題である。ここでの提案は通言語的にもアイヌ語内部の観察としても説得力を持っており、今後とくにアイヌ語の形態論やアクセントの分析などにとって重要なよりどころとなるだろう。なお「第 21 課 連体修飾表現」の末尾に例示されている *aynu itak haw* 「人・話す・声」、*teppo pus hum* 「鉄砲・破裂する・音」などは、*itak* や *pus* を自動詞由来の名詞と解釈し、*itakhaw* 「話し声」、*pushum* 「破裂音」のような複合名詞が作られていると考えてはどうだろうか。

同じ課の後半では、*o*、*us*、*oma* のようないわゆる「場所目的語動詞」に対し、従来のように場所を目的語にとる用法だけを認定するのではなく、場所を主語にとる用法を認定するという見解が示されている。この提案も、今後さまざまな議論を引き起こす発展性をはらんだ興味深いものである。ただし評者の読解する限り、*uray-us-nay* や *ye-ot* などの *uray/ye* を「やな・を常在して持つ・沢」「～が膿を持つ」のように目的語に読まなければならない理由はよくわからなかった。たしかに、*us* 「つく」のような動詞の主語と目的語とは意味上の強い対称性を持つので、どちらを主語とも解釈することができるという指摘は重要である。しかしアイヌ語の他動詞主語の抱合が場所の項を要求しない他動詞でも起こることは「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」(田村すゞ子、1973) もすでに指摘し本書の「第 28 課 抱合」も実例を挙げている。また本書が例示している *kamuy-e-p* のように、句としての性格を認めなければならない名詞(句)のなかにも場所の項を要求しない他動詞は現れている。すると場所を主語とする用法を認めたとしても、アイヌ語の動詞と名詞の形成のルールは整理されないことになる。おそらく評者の理解が足りないのだらうと思われるので、さらなるご教示を乞う。

6 刊行後に北海道大学で行われた著者のご講演を伺ったとき、いずれテキスト講読篇の音声(別売?)を提供する予定であるとうかがった。一日も早い実現が待たれる。また本稿 1 にも述べたとおり、文法篇に収められた例文はいずれも極めて価値が高い。物語のテキストに比べて編集の手間はより大きいだろうが、同じく音声を提供していただくことを要望する。本書の例文の音声は、学習者にとって大いに助けになるだけでなく、今後のアイヌ語の研究にとってもはかり知れない貢献となるからである。ご講演のとき仰ったように「お互いさま」の要望ではあるが、ぜひともお願いしたい。

(おくだ・おさみ/札幌学院大学)